

令和6年度学校推薦型選抜最終選考小論文課題

東京大学教養学部教養学科

受験番号

氏名

本冊子は、指示があるまで開かないこと。

課題開始後、表紙に受験番号、氏名を必ず記入すること。

解答用紙は、両面1枚のみとする。

草稿用紙としてB4用紙2枚を使用してよい。

本冊子は、終了後に回収する。持ち帰らないこと。

本冊子

表紙 1枚

白紙 1枚

課題 3枚

東京大学教養学部

小論文課題（教養学科）

次の文章を読み、以下の設問に答えなさい。

（一）傍線部①に「ポピュリズムと民主主義の難しい関係」とあるが、これはどのような関係を指すか。七行以内でまとめて説明しなさい。

（二）傍線部②に「英米両国でポピュリズムが起きた」とあるが、日本ではどうか。日本の状況とその原因についてあなたの考えを述べなさい。

民主主義の四つの危機

現代は民主主義がさまざまな危機に直面している時代です。いずれも大きな危機であることに加え、それらが同時に押し寄せているのが特徴です。結果として、民主主義はいわば「瀕死」の状態にあるといえます。「民主主義はこの苦境を越えられないのではないか」「もはや民主主義の時代は終わったのではないか」という懸念を、私たちは日々、耳にしています。

しかしながら、これから本書でみていくように、過去においても民主主義は何度も危機を乗り越えてきました。というよりもむしろ、民主主義はつねに試練にさらされ、苦悶し、それでも死なずにきたというのが現実に近いでしょう。いつの時代にも民主主義の批判者はいました。それでも民主主義は続いてきたのです。

そうだとすれば、今回の危機についても、民主主義が自らを変容させ、進化させるきっかけとする可能性を否定できません。そのためにもまず、現在、民主主義がいかなる危機と向き合っているのかを冷静に見定める必要があるでしょう。

今日における民主主義の危機を、四つのレベルで考えてみたいと思います。第一はポピュリズムの台頭、第二は独裁的指導者の増加、第三は第四次産業革命とも呼ばれる技術革新、そして第四はコロナ危機です。第一が主として欧米の先進諸国の問題であるとすれば、第二は中国をはじめ、アジアやアフリカなどの国々に多く見られます。そして第三と第四は、まさに全世界的な現象です。

ポピュリズムの台頭

ポピュリズムという言葉が、世界的な話題になったのは二〇一六年でした。大きな転機になったのは、同年六月のブレグジットです。議会主義の祖国ともいわれた英国で国民投票が行われ、EU（欧州連合）からの離脱を決めたことは、世界に大きな驚きを与えました。背景にはさまざまな要因がありますが、離脱キャンペーンにおいて、「EUを離脱すれば、分担金を国民保険サービス（NHS）に回せる」といった多くの虚偽の情報が飛び交い、それが投票の結果に少なからぬ影響を与えたことは間違いありません。

ブレグジットの背景としてしばしば指摘されるのが、中高年の白人労働者層を中核とする、いわゆる「置き去りにされた人々」の不満です。産業構造の転換な

どによって経済的に苦境に立たされた人々が、首都ロンドンや移民・外国人労働者への反発を強めるなか、E.U.離脱によって英国の自己決定権を取り戻し、主権を回復する」という訴えかけはきわめて魅力的に響きました。虚偽の情報によって扇動された側面があるとしても、そのような「置き去りにされた人々」ととって、E.U.離脱はまさしく「民主主義の勝利」だったのです。ここにポピュリズムと民主主義の難しい関係が表れています。

たしかにポピュリズムは、不正確な、ときに虚偽の情報に踊らされ、扇動された大衆による非合理的な決定として理解される側面があります。さらに、自らの権力獲得のために、そのような大衆を操作し、あるいは迎合する政治家の政治的スタイルを指してポピュリズムと呼ぶこともあります(その場合、「大衆迎合主義」とも訳されます)。

しかしながら、政治学者の水島治郎^{じろう}が指摘するように、このようなポピュリズムを民主主義への脅威としてのみ捉えるのは一面的でしょう(『ポピュリズムとは何か』)。ポピュリズムには既成政治や既成エリートに対する大衆の異議申し立ての側面もあります。その意味では、ポピュリズムを單純に民主主義と対立させるわけにもいきません。むしろポピュリズムには民主主義と相通じる部分があり、ポピュリズムが提起した問題に対して、民主主義も正面から取り組む必要があるのです。

同年一二月の米大統領選挙も、ポピュリズムを考える上で重要なきっかけとなりました。公職についたことがなく、政界の完全なアウトサイダーであった不動産王ドナルド・トランプは、多くのメディアや専門家の予想を裏切り、選挙戦に勝利します。目立ったのは、ヒラリー・クリントンら既成の政治的エリートに対する、ときにフェイク・ニュースを含む激しい攻撃と、特定の国からの移民を犯罪者扱いし、メキシコ国境に壁を建設するといった差別的な主張でした。自らに批判的な『ニューヨーク・タイムズ』やCNNを罵倒し、「アメリカ第一主義」を唱えて世界を困惑させるなど、これまでのアメリカ政治の常識を覆したトランプですが、結果として大旋風を巻き起こし、大統領に当選したのです。

さらにこの大統領選挙では、ロシアによるサイバー攻撃やSNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)を通じたプロパガンダによる、トランプ勝利のための大規模な介入があったとされます。もし仮に、一国の選挙が他国によって容易に操作されるとすれば、民主主義にとつて由々しき事態です。政治家自身によってマスメディアが攻撃されるなか、国際的な情報操作が加わり、いったい何を信じればいいのか、「フェイク」とそうでないものに境界線があるのか、深刻な疑問が生じるようになりました。

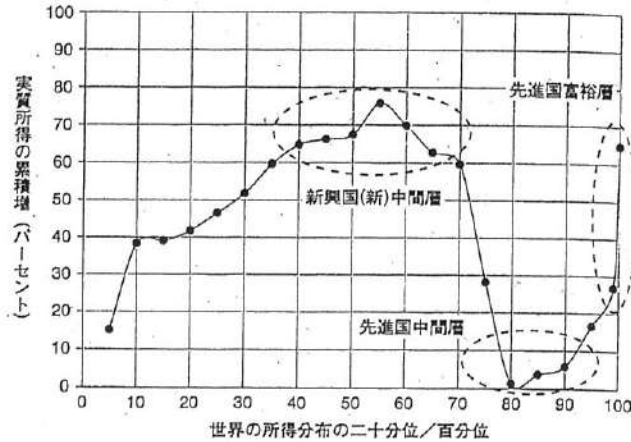
一方、選挙戦を通じて、このようなトランプを熱狂的に支持する人々の存在が浮き彫りになったのも明らかです。「ラストベルト(さびついた地域)」と呼ばれる旧工業地帯において、かつてアメリカの産業を支えた労働者たちは、地域の衰退と自らの前途への不安に苛まれています。彼らにとつて、既成政党への失望やグローバル化への反発の感情を受け止めてくれる政治家は、トランプしかないかっただけです。「アメリカを再び偉大にしよう(メイク・アメリカ・グレイト・アゲイン)」という訴えかけは、そのような人々の心の琴線に確実に触れました。社会に潜在する不安や不満をすくい上げるのが民主主義の役割であるとすれば、ト

ランプの選挙戦もまたそのような役割をはたしたといえるのではないのでしょうか。それが言論への抑圧や排外主義などと結びついたところに、問題の複雑さがあるのです。

ポピュリズムという言葉、あるいはこの言葉が指すような現象は決して新しいものではありません。既成政党やエリートへの不信が募った時代に、不満を持った人々が既存の中間的な組織（政党や労働組合、利益集団、宗教組織など）を飛び越して、カリスマ的な指導者を直接支持し、それが大きな政治的な変動を引き起こすことは、二〇世紀の南米諸国などでもしばしば見られました。しかし、二〇一六年のブレグジットやトランプ現象が注目されるのは、②現代グローバル

ムを先導するとされる英米両国でポピュリズムが起きたからです。

既存の枠組みに止まる限り、自分たちの不満や不信は無視されるばかりだと考えた人々が、一人の指導者に思いを託すこと自体は否定されるべきではないでしょう。とはいえ、そのことが、代表制の機能不全を前提とするものであり、より日常的なレベルで自分の考えを政治と結びつけていく回路の不在を意味するならば、民主主義にとってけつして幸福なことではありません。ポピュリスト指導者たちは、人々のこのような不満や不信を土壌に力を拡大します。やがては自分だけが国民を代表するとして、他の政治家や組織を抑圧することも少なくありません。ポピュリズムが続く状態はやはり問題です。



グローバルな所得水準で見た一人当たり実質所得の相対的な伸び 1988-2008年
(ブランコ・ミラノヴィッチ『大不平等 エレファントカーブが予測する未来』
みすず書房、13頁を元に作成)

しばしば指摘されるように、グローバル化の進むなかで、「エレファント・カーブ」と呼ばれる現象がみられます。国境を越えた経済活動が活発化することの恩恵を受けるのが、主として先進国の富裕層（象の鼻の部分）と、中国やインドといった新興国の中間層（象の頭の部分）に限られるということです。象の鼻のつけ根にあたる先進国の中流以下の人々は、グローバル化の恩恵よりはむしろダメージを受けて、経済的に苦境に立たされることになりました。先進国の内部で中間層が没落し、格差が拡大するなかで、はたして民主主義は維持可能なのでしょうか。格差の拡大は国民の一体性の感覚を損ない、世論の分断化を招きますが、民主主義はそのような分断を乗り越えられるのでしょうか。二〇一六年のポピュリズムは、これらの問題を大きくクローズアップしました。

令和 6 年度学校推薦型選抜最終選考小論文課題

東京大学教養学部学際科学科

受験番号 _____ 氏名 _____

本冊子は、指示があるまで開かないこと。

課題開始後、表紙に受験番号、氏名を必ず記入すること。

解答用紙は、両面 1 枚のみとする。

本冊子は、終了後に回収する。持ち帰らないこと。

本冊子

表紙 1 枚

白紙 1 枚

課題 3 枚

草稿用紙 2 枚

東京大学教養学部

以下の文章を読み、設問に答えなさい。

都市とは、そもそもどのように誕生したのだろうか。都市史学者の伊藤裕久は日本の都市の成り立ちを以下のように説明する。中世では、都市ははっきりとした形では成立しておらず、「①都市の性格を有した場所」が、市、宿、浦、泊、津、境内、門前とよばれる場所として、流通や宗教の機能に附随してあちこちに存在していたという。これらはまとまって一カ所に存在したのではなく、地域の中に緩やかに連坦しあって都市的な場所を形成し、やがてそれらが江戸時代に城下町が計画的な意図をもって形成されていく過程の中で、城のまわりに取り込まれていった。

この「都市の性格を有した場所」を成立させる力学を単純化して考えてみよう。例えば「ヤサイ」という集落があり、そこでは野菜がとれる。一方で「コメ」という集落があり、そこでは米がとれる。一方で「ニク」という集落は猪の狩猟を行っている。ヤサイに住む人が「イモの煮物ばかりで飽きてきたので、たまにはカレーを食べてみたい」と考えたときに、それを実現させるには2つの方法がある。1つは、ヤサイとコメとニクでそれぞれの産物を交換する場を設ける方法、もう1つはヤサイとコメとニクから産物を集め、集まった量に応じてそれぞれの産物を公平に再分配するという方法である。

前者の「交換」を行う場が「市場」であり、後者の「再分配」を行う場が「政府」である。

ひと月に一度しか開かれなかった市場は、そこに参加する集落の増加や人口の増加、産物の多品種化によって定常的に開かれるようになる。政府も徴収と再分配の仕事が増え、複雑化するにそって組織化されることになる。これら市場と政府が、「都市の性格を有した場所」となっていくのである。

市、宿、浦、泊、津とは、こういった交換や再配分の結節点にかたちづくられた場所である。交換と再分配にあたってコメとニクとヤサイの人たちが、それぞれ不満を言うこともある。あるいは、暴力によって相手の産物を奪おうとするかもしれない。それをまとめるために、市場と政府において、何らかの規範とそれを守らせるための力が必要である。その力は武力であることもあるし、人々の信仰心、つまり宗教の力であることもある。自由な交換の場である市場も、武力で守られてこそ、そこで自由な取引が成立したのであり、境内や門前といった場が都市の原型の1つであることは、宗教の力を使って、市場と政府が成立したということである。

「都市はどのように誕生したのか」という問いを突き詰めていくと、都市とは、そもそもコメとニクとヤサイの人たちが、「カレーを食べたい＝豊かな生活をしたい」と思ったときに、それを実現するために発明されたものである。それらがやがて連坦して都市をつくり、城下町を経て、日本の都市は巨大化していく。その間、農村で生まれた人たちに継続的に「カレーを食べたい」という必要性が生まれ続け、それは農村から都市への継続的な人口移動の動機になってきた。中世から数えて300年と少し、それまで農村で生き延びてきた私の先祖も、ついにカレーが食べたくなり、都市に出てしまう。今や都市が大きくなりすぎ、農村は

都市の付属物のように扱われることが少なくないが、都市と農村の立場が逆転したのはそれほど古いことではない。

このような視点に立ち返ると、都市はそもそも「豊かな生活をしたい」という目的に対する手段の集合体であったはずである。しかし、私たちは都市に働かされているような気がする。まるで、都市を維持することが私たちの目的であるかのような錯覚をしている。なぜ、いつのまに、目的と手段が逆転してしまったのだろうか。さらには、そもそも「目的」など私たちにあったのだろうか。都市に働かされるのではなく、私たちの目的にそって、どのように都市に働いてもらうべきなのだろうか。

(中略)

②日本の人口減少がいよいよ本格的にはじまり、近年は都市を縮小する様々な取り組みがうまれている。しかし立ち止まって考えてみよう。私たちは、都市のために、都市を縮小しようとしていないだろうか。

本来都市は、私たちが豊かに暮らすための手段であったはずだ。いつのまに、都市を維持することが私たちの目的にすり替わってしまったのだろうか？

人口増加時代では、増えつづける人々に豊かな生活をゆきわたらせるために経済を成長させることが目的であった。都市はそのための手段として使われたのである。人々はこの目的を積極的に選択したわけではないが、この共通の目的のもと、結果的にはスラムのような大きな空間の偏在を発生させることなく、増えつづける人々に豊かな生活をゆきわたらせることに成功した。都市計画の仕組みもそこに抜きがたく組み込まれており、都市計画によって都市の空間は経済市場の中を動き回る交換しやすい財となり、経済市場をより強固なものにすることに貢献した。

しかし、人口減少が本格化し、経済を成長させることが人々の共通の目的ではなくなる。都市の空間は余りはじめており、急いで都市の空間をつくらなくてもよい。共通の目的が持つ求心力は弱くなり、人々はそれを自分の目的とはしなくなる。かわって顕在化してくるのは、人々の小さな目的である。こうした小さな目的を実現するために、都市はどう使われ、その時に都市計画はどう機能すべきなのだろうか。

出典：饗庭伸（2015）『都市をたたむ—人口減少時代をデザインする都市計画』花伝社（一部改変）

問題

（１）下線部①について、筆者は、「都市の性格を有した場所」が、どのように形成されると説明しているか、わかりやすく要約しなさい。

（２）下線部②について、日本における「都市を縮小する様々な取り組み」であるとあなたが考える例をあげ、そのメリットとデメリットについて説明しなさい。

(3) 上記の文章で示された、筆者の「都市」に対する考え方を踏まえ、具体的な都市の例をあげながら、「都市を維持すること」に対するあなたの考えを論じなさい。

以上

草稿用紙

令和6年度学校推薦型選抜最終選考小論文課題

東京大学教養学部統合自然科学科

受験番号 _____ 氏名 _____

本冊子は、指示があるまで開かないこと。

課題開始後、表紙に受験番号、氏名を必ず記入すること。

解答用紙は、両面2枚のみとする。

本冊子は、終了後に回収する。持ち帰らないこと。

本冊子

表紙 1枚

白紙 1枚

課題 1枚

草稿用紙 2枚

東京大学教養学部

白紙

小論文課題

生物界には、細胞、多細胞個体、生態系のそれぞれの階層において大きな多様性が存在し、また同時に全ての生物に共通の普遍性も存在する。この生物界における多様性と普遍性の例をひとつずつ挙げ、そのいずれかに関連した新しい生物学研究を提案せよ。

研究提案は、1)背景、2)目的、3)方法、4)研究の意義、の4項目に分けてできるだけ具体的に記述すること。

以上

東京大学教養学部

草稿用紙

[illegible]

東京大学教養学部

